

## 信行要文 ①

第十二回 法華講夏期講習会 第一期

（平成二十七年五月十七日）

皆さん、おはようございます。

平成二十七年度の法華講夏期講習会第一期に当たりまして、皆様方には深信<sup>じんしん</sup>の登山、まことに御苦労さまでございます。

先般行われました第二祖日興上人御生誕七百七十年の記念行事は、すべて大成功裡<sup>り</sup>に奉修することができました。これも、ひとえに皆様方の絶大なる御尽力<sup>たまもの</sup>の賜物と、宗門といたしまして厚く御礼申し上げます。まことに有り難うございました。

宗門は、さらに平成三十三年の大聖人様の御聖誕八百年慶祝法要に向けて、前進を開始したわけでありまして。日興上人御生誕七百七十年の佳節に向かって、私どもは一生懸命に折伏に励みましたが、その勢いをもって、さらに僧俗一致団結して、いよいよ頑張っていたきたいと思います。

さて、本年は、既にお手元にテキストをお渡ししておりますが、このテキストに従いまして、お話を申し上げたいと思います。

まず、一番の『妙一尼御前御返事』であります。

### 1 妙一尼御前御返事

**夫信心と申すは別にはこれなく候。妻のをとこをおしむが如く、をとこの妻に命をすつるが如く、親の子をすてざるが如く、子の母にはなれざるが如くに、法華経・釈迦・多宝・十方の諸仏菩薩・諸天善神等に信を入れ奉りて、南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを信心とは申し候なり。（御書一四六七〇二行目）**

この御書は、弘安三（一二八〇）年五月十八日、大聖人様が五十九歳の時、妙一尼に与えられた御書であります。対告衆<sup>たいごうしゆ</sup>の妙一尼は鎌倉に住んでいた方ではありますが、色々と言説がありまして、一つには弁殿尼御前、あるいは王日女と同一人物との説もありますが、定かではありません。六老僧の一人、弁阿闍梨日昭の縁者とも言われている方でもあります。

この方の夫は、大聖人様の信徒として信仰に命を懸けたとされ、この妙一尼も強盛<sup>ごうじょう</sup>な信者であったと言われております。そのため、わずかに残った所領も信仰のために没収されたのですが、それでもなお大聖人様への御供養を怠<sup>おこた</sup>らなかつたのであります。

また、建治元（一二七五）年にも『妙一尼御前御消息』を、大聖人様から頂いております。

本抄の内容につきましては、極めて短文でありますけれども、そのなかに、世情に寄せて巧みに信心の境地を示し、信心とは御本尊を信受し、唱題することに尽きると、譬<sup>たと</sup>

えを<sup>あ</sup>挙げて教えられておるのであります。

その初めに「**夫<sup>それ</sup>信心と申すは別にはこれなく候**」とありますが、信心とは、ことさらに力んで、身<sup>み</sup>構<sup>がま</sup>えて行うものではなくして、我々の普段の生活のなかで、ごく当たり前に行われるものでなければならない、という意味であります。例えば、朝夕<sup>ちようせき</sup>の勤行にいたしましても、あるいはまた折伏にいたしましても、信心そのものが日常のなかで、至極当然のこととして行われなければならない、ということであります。

よく、皆様方も御承知の通り、「水の如き信心」とか「火の如き信心」ということを言いますけれども、言わば、それに似たようなものであります。たしかに火は、一時<sup>いっとき</sup>は燃え盛って威勢がいいのでありますけれども、それが消えてしまうと、全く勢いがなくなってしまう。それに対<sup>とうとう</sup>しまして、水の信心というのは、滔々と水の流れるように、絶えることなく続けていく信心であります。

やはり、我々の生活のなかで、そういう信心が大事であるということも、よく覚えておいていただきたいと思えます。

よって、そのことを「**妻<sup>夫</sup>のをとこ<sup>惜</sup>をおしむが如く、をとこの妻<sup>捨</sup>に命<sup>捨</sup>をすつるが如く、親の子をすてざるが如く、子の母にはなれざるが如くに**」と、夫婦あるいは親子の、ごく自然の情愛に寄せて、信心とはかくあるべしと説かれているのであります。

つまり、夫婦であるとか親子の関係というのは、もう、これは理屈ではありません。全く自然のままに育<sup>はぐく</sup>まれていくものであります。我々の信心も、そういうことでなければならないのであります。

この慕い、慈<sup>いつく</sup>しむ心をもって、次に「**法華經・釈迦・多宝・十方の諸仏菩薩・諸天善神等に信<sup>い</sup>を入れ奉りて、南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを信心とは申し候なり**」と仰せであります。この「法華經・釈迦・多宝・十方の諸仏菩薩・諸天善神等に信を入れ奉りて」とは、十界互具の御本尊に対して南無妙法蓮華經と唱え奉るのが信心である、ということなのです。

さらに、このあとの御文を拝しますと、

「しかのみならず『**正直捨方便、不受余經一偈**』の經文を、女のか<sup>鏡</sup>ゞみをすてざるが如く、男の刀をさすが如く、すこしもすつる心なく案じ給ふべく候」（御書 一四六七）

と仰せであります。

「正直捨方便、不受余經一偈」とは「正直に方便を捨てて、余經の一偈をも受けざれ」と読みます。これは法華經の文であります。この御文に仰せの如く、謗法に対しては、けっして妥協を許さない、そういう強い信心、姿勢が大事であります。

また「女のかゞみをすてざるが如く、男の刀をさすが如く」というのも、先程も言いました通り、日常生活のなかで、ごく当たり前、我々は謗法<sup>しゅうぜ</sup>厳誠の宗是を身につけた信心をするのが肝要である、ということです。

ある時、創価学会の大幹部<sup>みこし</sup>が御輿<sup>かつ</sup>を担いで「これをしたかったんだ」とうそぶいていましたけれども、結局、ああいうことをやるから、だんだん、だんだんと信心がおかしくなっていってしまうのです。黒柳とかいう名前でしたが、御輿を担いで「これをやり

たかった」って言う。やっぱり、これは大謗法ですよ。そういうことになってしまうのです。だから、普段の信心というのが極めて大事なのです。普段からしっかりと信心を積み重ねていくと、自然に謗法厳誠ということが身についていくのです。

宗門では、昔からよく言うでしょう。ほかの神社仏閣の前で、わらじの鼻緒はな おが切れても結び直すなど、聞いたことがあるでしょう。本当は切れた鼻緒を結び直すだけなのですけれども、その姿勢がちょうど頭を下げる格好になるので、謗法厳誠の意味から、それもだめですよと言われるのです。

少し厳しいようだけれども、やはり非常に大事なことです。こういうものが、自然に身についていくことが大事なのです。普段から、きちんとした信心活動をやり通していけば、また折伏をしていけば、それは必ず身についてくるのです。しかし、それができないと、今言ったように、おかしいことを平気でやるようになってしまうのであります。

次にまいります。二番の『大田殿女房御返事』です。

## 2 大田殿女房御返事

妙法蓮華經の五字の中に、諸論師・諸人師の釈そまらちまちに候へども、皆諸經の見けん いを出いでず。但し、竜樹菩薩の大論だいろんと申す論たとに「譬へば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如くし」と申す釈たこそ、此の一字を心へさせ給たまひたりけるかと見へて候へ。毒と申すは苦く集じゅうの二諦にたい しょうじ、生せい死じの因果いんぐわは毒の中の毒にて候ぞかし。此の毒を生死ねはん即ぼんのう涅槃ぼだい・煩惱ぼんごう即ぼだい菩提ぼだいとなし候を、妙の極とは申しけるなり。良薬と申すは毒の変じて薬となりけるを良薬とは申し候ひけり。(御書一四七二頁三行目)

当抄は、弘安三(一二八〇)年の七月二日、大聖人様が五十九歳の時に、大田乗明夫人から御供養のお米を送られてきたことに対して差し上げられた、お礼の御書であります。

対告衆の大田乗明夫人は、夫と共に早くから大聖人様の門下となっておりまして、仏教に関する素養があり、大聖人様から数回にわたってお手紙を頂いております。

御主人の大田乗明という方は鎌倉幕府の間住所の役人で、問注所というのは訴訟の受理などを扱った、幕府の裁判所の一部局であります。大聖人様が松葉ヶ谷まつはの法難のあと、下総しもづさの富木常忍邸に滞在をしていたころ、曾谷教信や秋元太郎などと同じ時期に入信されたと言われております。

下総国葛飾郡八幡やわたのしょう 莊ごう 中山郷(現在の千葉県市川市中山)に住み、富木氏や曾谷氏らと共に、下総中山を中心に、大聖人様のもとして外護の任に当たられた方であります。

弘安元(一二七八)年ごろ、入道をして「妙日」という号を頂き、自邸を本妙寺といたしました。これが今の中山法華経寺であります。

この方は『三大秘法抄』あるいは『転重軽受法門』など、重要な御書を多数頂いている当時の強信者であり、また、この方の次男は出家をして、帥公日高そつこうと名乗っております。

この御書の大意を申し上げますと、まずお米を御供養されたことについてお礼を述べ

られたあと、「諸大乘經に載せているところの『即身成仏』の文は、二乗呵責のため  
の方便の文であって、その実義はない。真の即身成仏は、法華經に限った重大法門であ  
って、弘法・慈覺・智証等が『真言宗に即身成仏有り』と言うのは、大日經に原文はあ  
っても、即身成仏の実義が説かれていないかぎり、名は有っても実が無い、有名無実  
である」とおっしゃっております。

このなかの「弘法」は、法華經は第三の戲論と批判した者でありまして、大聖人様は  
この弘法の法華誹謗の罪を厳しく責められており、特に『撰時抄』では厳しく破折され  
ております。

また「慈覺」というのは比叡山延暦寺の第三代の座主で、伝教大師の弟子でありなが  
ら真言の宗義に傾倒して、大日經第一、法華經第二、諸經第三という、わけの解らない  
教判を立ててしまった者であります。

それから「智証」は延暦寺の第五代で、これは弘法の甥に当たると言われております。  
比叡山の山王院に住み、たびたび密教の灌頂を行なったということでもあります。灌頂と  
いうのは、真言密教で言うところの仏門に入る時の儀式の一種ですけれども、これを密  
教で行うなど、全く真言に毒されてしまった者であります。

これら弘法・慈覺・智証の三人の思想は、比叡山に在りながら、結局は不空三蔵の  
謬誤・僻見に起因するものである、とおっしゃっております。特に、この御書のなか  
では真言宗を指して、国家の様々な災厄は全部、真言の邪義・邪法に起因すると仰せで  
あります。したがって、大聖人様は「念仏無間・禪天魔・真言亡国・律国賊」の四箇の  
格言を挙げられるなか、真言は国を亡ぼす邪義であるとおっしゃっているのであります。

また、不空三蔵の話が出てきますけれども、不空三蔵は中国・唐代の密教の僧侶で、  
善無畏三蔵、金剛智三蔵と共に、真言の三三蔵と言われております。大聖人様は、この  
三三蔵につきまして、『三三蔵祈雨事』という御書を認められておりますけれども、  
解りやすく言いますと、

「三人とも祈雨を行って大雨を降らせたけれども、大風が吹いて、かえって国土を荒  
らしたとある。すなわち、第一に善無畏三蔵が中国に渡った時は、唐の玄宗の時代で  
あった。大干魃があって、祈雨の法を仰せつけられて大雨を降らせたので、上一人よ  
り下万民に至るまで大いに喜んでいたところ、しばらくして大風が起こって国土を吹  
き荒らしたので、皆が興奮めてしまった。

また、その時代に金剛智三蔵が、同じように雨の祈りを行なったところ、七日のう  
ちに大雨が降り、前の時のように喜んでいたものの、これもやはり前代未聞の大風か吹  
いたので、真言宗は恐ろしい悪法であるとして、インドへ追い返されようとしたが、  
あれこれ言い繕って留まってしまった。

同じように、不空三蔵も雨を祈ったところ、三日のうちに大雨が降り、喜びは前の  
時のようであった。しかし、また大風が吹いて、しかも前の二度の時よりも激しく、  
その大風は数十日もやむことはなかった」（御書 八七四取意）

と、このようにおっしゃっております。

ですから、雨の祈りによって、たしかに雨は降ったけれども、それが逆に災いをなし

てしまうと、大聖人様は三三蔵の祈雨の例から、真言亡国の姿をおっしゃっているわけ  
であります。

やはり、真言が国を亡ぼすと言う一番の元は、法華経を第三あるいは第二と貶める  
ような教義を公然と述べているところの姿にあるのです。

さて、本文に入りますと、まず「妙法蓮華経の五字の中に、諸論師・諸人師の釈まち  
まに候へども、皆諸経の見を出でず」とありますが、実は、この御文の前に、  
「釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌・竜樹菩薩・天台・妙楽・伝教大師は、即身成仏  
は法華経に限るとをぼしめされて候ぞ。我が弟子等は此の事ををもひ出にせさせ給へ」  
(同 一四七二)

とおっしゃっております。すなわち「爾前諸経に、いかに即身成仏ありと説かれていよ  
うとも、釈尊をはじめ諸仏、諸菩薩、ならひに天台、妙楽、伝教等は、いずれも真の即  
身成仏は法華経に限ると言われている。よって、我が弟子達は即身成仏、疑いがないので  
あるから、安堵するように」とおっしゃっているのです。

しかるに、弘法や慈覚や智証達は、『菩提心論』の、

「唯真言法の中にのみ即身成仏する」(同)

という文に誑惑されて、即身成仏は真言に限ると、愚にもつかないことを主張している  
わけであります。

そこで大聖人様は、この『菩提心論』につきまして、『星名五郎太郎殿御返事』にお  
いて、次のように破折されております。要約しますと、

「真言宗に『菩提心論』という一卷の書がある。古来、竜猛菩薩つまり竜樹菩薩の  
著と言われておるけれども、この書のなかに『即身成仏という大事は、たゞ真言法の  
特権で、この大法は、真言以外の諸經典中には皆無である』と言っている」(同 三  
六五取意)

つまり、即身成仏というのは真言にしかないと、『菩提心論』のなかで言っているので  
あります。

「そこで、この語を吟味すると、それはまことに不審、極まるものである。かの真言  
経に即身成仏の語はないとは言わないが、即身成仏した人は全くいない」(同取意)  
たしかに、經典のなかに「即身成仏」の語はあるけれども、実体として、真言によって  
即身成仏した者はいないと、このようにおっしゃっているわけであります。

「また、もし、あるとしても、法華経のなかにははっきりと即身成仏の事実が示され  
ているのであるから、即身成仏は真言以外の經典にはないなどと言うべきではない。  
このように『菩提心論』は、自家撞着の見に墮しているもので、はなはだもって不  
可、よくない書である。

なお、この書は竜樹菩薩の作とは言っているけれども、たとえ本書を竜樹菩薩の作  
としたとしても、実は誤りのはなはだしきもので、結局は竜樹菩薩の作ではないと認  
めざるをえないものである。よって、法華経と対比するも、その著者について吟味す  
るも、『菩提心論』は全く信ずべからざるものである」(同取意)

と、このように大聖人様は『星名五郎太郎殿御返事』のなかでおっしゃっているのであ

ります。

よって、これを当文においては「妙法蓮華經の五字については古来、幾多の学者が種々様々な解釈を施<sup>ほどこ</sup>しているが、いずれも法華經以外の方便の権經の立場から見たもので、全く真意から離れたものである」と仰せられまして、この『菩提心論』の邪説を破折しております。

次に「但し、竜樹菩薩の大論と申す論に『譬へば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し』と申す釈こそ、此の一字を心へさせ給ひたりけるかと思へて候へ」とあります。

「竜樹菩薩の大論」というのは『大智度論』のことでありまして、『大論』とか『智度論』と略称することもあります。この『大智度論』という名は「摩訶般若波羅蜜經釈論」を意味いたします。『大智度論』の大は摩訶、智は般若、度は救うという意味がありますが、これは波羅蜜に当たります。

『大智度論』は摩訶般若波羅蜜經、つまり大品般若經の注釈書ではありますが、法華經などの諸大乘經の思想を取り入れて解釈し、また大乘の菩薩思想や六波羅蜜などの宗教的実践の解明にも努めております。仏教の諸々の思想を知る上で、非常に重要な文献でありまして、のちの一切の大乘思想の母胎となったものであります。

そこで、当文の意は「竜樹菩薩の『大智度論』に『法華經の妙旨は、例えば大薬師、つまり大名医が、毒を変じて薬と為すようなものである』と解釈されているが、これこそ、竜樹菩薩が妙法蓮華經の妙の一字の意味を会得して言われたものである」と仰せられております。

ちなみに「変毒為薬」の語というのは、皆さん方も聞いたことがあると思いますが、それは、この『大智度論』の「大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」の文に由来するのであります。

つまり「変毒為薬」とは、妙法蓮華經の偉大なる功力<sup>くりき</sup>によって、一切衆生の煩惱・業・苦の三道を、法身・般若・解脱の三徳に転ずることを言うわけであります。

もちろん、ここで言う「三道」というのは、衆生が六道の生死を続けていく状態を示したもので、煩惱<sup>むみょう</sup>というのは、無明<sup>とんよく</sup>、貪欲<sup>しんに</sup>、瞋恚などの煩惱のことです。業というのは煩惱から起こる善悪の身口意の所作<sup>しんく</sup>のことで、苦とは惑・業を因として招いた三界六道の苦果、いわゆる苦しみ<sup>あい</sup>のことです。

この煩惱・業・苦の三つが相通じて、煩惱から業に、業から苦に、そしてまた苦から、さらに煩惱を生じ、ちょうど輪のように展転して連続する姿を「三輪」とも言うのであります。

また、法身・般若・解脱の三徳<sup>そな</sup>というのは、仏様に具わるところの三種の徳相のことで、法身というのは仏様の所証の真理、般若とは真理を悟る智慧のことで、解脱とは、この法身・般若の二徳が一如となり、生死の苦界から脱却した状態を言うのであります。大聖人様は『当体義抄』のなかに、

「正直に方便を捨て但法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる人は、煩惱・業・苦の三道、法身・般若・解脱の三徳と転じて、三觀・三諦即一心に顯はれ、其の人の所住の処は常寂光土なり」(同 六九四)

と、妙法蓮華經<sup>りきゆう</sup>の力用を示されまして、三道の流転を三徳に転ずることができるのが妙法蓮華經であると示されているわけでありませう。

次に「**毒と申すは苦集の二諦、生死の因果は毒の中の毒にて候ぞかし。此の毒を生死即涅槃・煩惱即菩提となし候を、妙の極とは申しけるなり。良薬と申すは毒の変じて薬となりけるを良薬とは申し候ひけり**」とおっしゃっております。

この段は、生死の苦果を招く「毒」について述べられており、毒というのは何かというと「苦集の二諦」であるとされております。すなわち、苦諦というのは迷いの果報として生を受けたこの世界は、すべて苦であるということであり、集諦<sup>じつたい</sup>というのは苦の果報を集め起こす原因は煩惱や執着であるということです。この苦集の二諦は迷いの世界の果と因を示してござりまして、この苦と集の因果は、この二つが生死の原因(集)となり、そしてその結果として苦しむという生死を繰り返していくことから、この苦と集を「毒の中の毒」と言われているのであります。

よって、この毒を「変毒為薬」あるいは「生死即涅槃」「煩惱即菩提」と転ずることを、妙の極理と言うのでありと仰せられております。

生死即涅槃というのは、生死の苦しみがそのまま涅槃の悟りとなり、生死も涅槃も一体不二であると知ることでありませう。生死は煩惱・迷いの境界であり、九界を指します。涅槃は菩提・悟りの境界であり、仏界を指します。つまり、九界即仏界・仏界即九界という言葉<sup>を聞いたことがあると思ひますが、そのことでありませう。これは煩惱即菩提と意味が同じでありませう、『摩訶止観』には、</sup>

「煩惱<sup>こ</sup>是れ菩提なりと名づけ、亦煩惱<sup>また</sup>を断ぜずして涅槃に入ると名づく」(学林版止観会本下 二八四頁)

とありませうように、法華經では煩惱即菩提と示して、煩惱の迷いを断じなくとも、そのまま悟りとなることが説かれているのであります。

その煩惱即菩提とは煩惱がそのまま菩提となることで、煩惱というのは衆生の生命に具わる貪瞋癡等の根本の欲望や妄念のことでありませうが、成仏得道の障りとなる一切の迷いを、このように言っているのであります。それに対し、菩提<sup>さわ</sup>というのは仏道修行の結果として得られる悟りのことでありませうして、そのなかでも最高・究極の菩提とは、まさしく即身成仏の大果報のことでありませう。

爾前諸經では、菩提を得るために無量劫という長い期間を要して、見思惑<sup>けんしわく</sup>・塵沙惑<sup>じんじゃ</sup>・無明惑<sup>むみょう</sup>の三惑を順々に断ずると説いてござりませう。

見思惑<sup>し</sup>というのは、細かく言うと、見惑と思惑の二つのことでありませうして、総合的に言うと、三界六道の苦果を招くところの惑、すなわち煩惱を言うのでありませう。

次の塵沙惑は、大乘の菩薩が他を救済・化導する時の障害を言うのでありませうして、人を教化するためには無量無数の法門に通達していなければならず、それらの学ぶべき境界に従って起こる無量無数の惑を言うのでありませう。つまり、塵沙とは無量無数の意でありませう。

そして、三番目が無明惑でありませうが、無明<sup>し</sup>というのは明るくないという意味でありませうから、中道法性の悟りを妨げる一切の煩惱の根本となる惑、つまり煩惱のことで、

これを無明惑と言うのであります。真如中道の理に無明、つまり無知であるために、仏の境地を見ることができずに、より劣悪な法に囚とらわれてしまうことを言います。

このことについて『御義口伝』には、

「元品の無明を対治する利劍は信の一字なり」（御書 一七六四ツ）

とありますが、「元品の無明」というのは衆生の本然的に具わっている根本の迷いであり、このように、ただ三大秘法の御本尊を唯一無二と信じて唱題することによって、無明即法性の妙理にかなって煩惱即菩提と開覚し、真実の成仏の境界を得ることができるとおっしゃっております。

我々の様々な煩惱の根本となるのが、この無明の煩惱でありますから、それを対治するのは、ただただ三大秘法の御本尊を信じ奉ることに尽きるのです。逆に言えば、三大秘法の御本尊をしっかりと拝して、信じ奉っていけば、煩惱にも囚とらわれぬし、思い悩んだとしても、必ずそれを打ち破ることができると言われてるのであります。

これに対しまして、法華経では一念三千の法門により九界即仏界・仏界即九界の法義が確立して、煩惱と菩提は衆生の生命に共に具わっており、本来、不二であり、全く別ではないと説かれております。すなわち、衆生の煩惱は、妙法の光明に照らされた時、そのまま菩提の仏果と開かれるのであります。

このことは、法華経の結経である観普賢菩薩行法経に、

「煩惱を断ぜず、五欲を離れずして、諸根を浄きよめ、諸罪を滅除することを得」（法華経 六一〇ツ）

と説かれております。また『当体義抄』にも「正直に方便を捨て但法華経を信じ、南無妙法蓮華経と唱ふる人は、煩惱・業・苦の三道、法身・般若・解脱の三徳と転ず」と説かれております。御本尊を信じて題目を唱える人は、御本尊の功德力によって煩惱を即、菩提と転じ、即身成仏の大利益を得ることができる、ということでありませぬ。

つまり、良薬というのは、このように毒がそのまま変じて薬となったことを言うのでありませぬ、まさしく御本尊の広大無辺なる功德を示して変毒為薬、毒を変じて薬と為すとおっしゃっているのであります。

次に、三番の『千日尼御返事』です。

### 3 千日尼御返事

法華経に云はく「若し法を聞く者有らば一ひとりとして成仏せざること無し」云云。文字は十字にて候へども法華経を一句よみまいらせ候へども、釈迦如来の一代聖教をのこりなく読よむにて候なるぞ。（中略）されば此の経文をよみて見候へば、此の経をきく人は一人もかけず仏になると申す文なり。（御書一四七四ツ七行目）

この『千日尼御返事』は、弘安三（一二八〇）年七月二日、大聖人様御年五十九歳の時、佐渡の千日尼に与えられた御書であります。

この千日尼の出身などは明らかではありませんけれども、日蓮大聖人様の佐渡配流中



に、夫の阿仏房と共に入信をして、塚原三昧堂さんまいにたびたび大聖人様を訪ねられ、いく度となく御供養をされている方であります。

また阿仏房は元々、順徳上皇の北面の武士であり、上皇が佐渡に流された時に、共に佐渡へ来て定住したとの伝承もありましたが、近年の研究では、土着の人であったとされておりま

す。大聖人様の佐渡配流中に、塚原三昧堂で大聖人様を論詰しようとしたのでありますけれども、かえって大聖人様から折伏を受けて、妻の千日尼と共に念仏を捨てて、大聖人様にきえ帰依した方であります。

当時、大聖人様がおられた塚原三昧堂という場所は、『種々御振舞御書』に、

「塚原と申す山野さんやの中に、洛陽らくようの蓮台野れんだいののやうに死人を捨つる所に一間四面なる堂の仏もなし、上はいたまはず、四壁はあばらに、雪ふりつもりて消ゆる事なし。かゝる所に敷皮しきがは打ちしきみの蓑うちきて、夜をあかし日をくらす。夜は雪ゆき霰あられ・雷いなづま電ひまひまなし、昼は日の光もさゝせ給はず、心細かるべきすまみなり」(御書 一〇六二頁)

と仰せのように、死者を埋葬する所、つまり蓮台野のような所に建てられた、あばら屋であったわけであります。

佐渡には大聖人様を憎み、怨嫉おんしつする者がたくさんおりまして、そういった者が、いつも大聖人様のことを見張っていたわけです。阿仏房夫妻は、そのなかを深夜、密かに大聖人様のおられる三昧堂へ、風雪を厭わず往復して、わざわざ大聖人様のために食べ物ひそを運ばれ、献身的に給仕をされた方であります。

大聖人様は、この時の様子を『千日尼御前御返事』に、

「地頭ちず・地頭等、念仏者ねんぶつ・念仏者等、日蓮あんにんが菴室あんしつに昼夜に立ちそいて、かよう人とをあるをまどわさんとせめしに、阿仏房にひつひつをしをわせ、夜中に度々御わたりありし事、いつの世にかわすらむ。只悲母ただはの佐渡国に生まれかわりて有るか」(同 一二五三頁)

とおっしゃっております。ここに仰せのように、地頭や念仏者達は、大聖人様の庵室に昼夜にわたって見張りを立てて、通う人々を妨害しようとするなかで、千日尼は、人目を忍んで阿仏房にひつ櫃ひつを背負わせ、大聖人様の所へお持ちしたということです。

櫃ひつというのは、御飯を入れるものです。年寄りの人は知っているでしょうが、若い人は知らないでしょうね。今は電気釜ですからね。前のほうに座っている人達は、だいたい、お櫃ひつを知っていますね。昔は、かまどで御飯を炊いて、釜の中の御飯を全部、お櫃ひつに移し入れて食卓に持っていき、それをお茶碗によそって食べたのですが、今は電気釜ですから、炊飯のスイッチを入れたら終わりですね。お櫃ひつについては、絵に描けば解りいいのですが、あとで年配の方に聞いてください。お櫃ひつを背負わせるということは、つまり御飯をお櫃ひつの中に入れて持っていくという意味であります。

そこで、大聖人様は「このことを、いつの世にか忘れようか。今は亡き母が、佐渡の国に生まれ変わったのではなからうか」と、大変な感謝の言葉をもって、この時のことを記しておられます。

また、同じく『千日尼御前御返事』に、

「去ぬる文永十一年より今年弘安元年まではすでに五箇年が間此こゝの山中に候に、佐渡

国より三度まで夫をつかわす」(同註)

とありますが、つまり阿仏房は大聖人様の身延入山後も、九十歳に及ぶ高齢の身でありながら、三度にわたって、はるばる佐渡の国から御供養を携え、大聖人様がおられた身延に登山されているのであります。

妻の千日尼も夫と心を合わせ、夫を身延に送り出して御供養されており、大聖人様はその都度、書を送って、厚い志に心から感謝されております。

その後、阿仏房は弘安二年三月二十一日にお亡くなりになりますが、子供の藤九郎が同年七月二日、遺骨を携えて登山して身延山に來られて、遺骨を身延山に埋葬し、翌弘安三年七月一日にも墓参のために身延山に詣でているのであります。

まさに、この阿仏房夫妻の登山参詣の精神というのが、今もなお語り継がれて、今日に至って、登山ということがいかに大事であるか、御戒壇様にお目通りすることがいかに大事であるか、阿仏房は遠い佐渡の国から山海を隔てて、そして九十歳に及ぶ身でありながら三度も身延へ來られた、その精神を私達はよく知らなければなりません。

さて、この御書の大意を述べますと、まず初めに御供養への感謝を述べられたあと、法華經方便品の、

「無一不成仏ひと（一りとして成仏せずということ無なけん）」(法華經 一一八註)

の功德を示して、阿仏房の成仏は法華經の明鏡に照らして間違いないと仰せられ、夫を失った千日尼を温かく激励されております。

そして、当抄が『孝子財御書』とも言われているように、阿闍世王あじゃせや安祿山やすろくざんなどの悪子の例を引かれるとともに、子が財となる例を引かれて子供の藤九郎の親孝行の心を褒められ、千日尼が良い子息を持ったことを喜ばれて、

「子にすぎたる財なし、子にすぎたる財なし」(御書 一四七八註)

と述べられているのであります。

ここに阿闍世王や安祿山などの例を引いたのは、両方とも悪子、親孝行ではないという意味からです。

特に阿闍世王は「未生怨みしょうおん」とも訳されますが、摩訶陀国まかだの王で、太子であった時に、提婆達多と親交があつて、仏教の外護者であった父・頻婆沙羅王びんばしやらを監禁して、獄死させて王位に即いた人であり、即位後に、僑薩羅国きょうさくらと争ったのですが、結局、和解して、僑薩羅国の波斯匿王はしのくの娘を妻としたのであります。また、生母・韋提希夫人いだいけの郷里の国を併合して、摩訶陀国を当時のインド第一の強国にした人であり、王は、のちに仏教に帰依し、經典の第一回結集けつじゅうの時には、これを外護しております。

未生怨というのは、生まれる以前から怨みを持っているという意味で、この未生怨の謂われにつきまして、伝えによると、世継ぎのなかつた頻婆沙羅王は、占い師に占ってもらったところ、山中に住む仙人が死後、太子となって生まれてくるであろうと予言されたわけです。その予言で仙人が生まれ変わって太子となると言われたものだから、王は早く自分の子供がほしいために、その仙人を殺してしまうのです。

そして間もなく、韋提希夫人が懐妊をしたのでありますが、占い師は「この子は生まれて、王の怨あだとなる」と死ぬ前に予言したので、未生怨と名づけられたということなの

です。

また、父は占いが的中することを恐れて、その子を楼上ろうじょうから地に投げ捨てたけれども、指を折っただけで死ななかつたので、阿闍世王のことを「婆羅留支ばらるし」、これは指を折るという意味で、このように名づけたということです。

悲劇と言えば悲劇でありますけれども、そういう因縁の人であります。

また「安祿山」というのは唐の節度使で、「安史の乱」という反乱を起こした者です。この安祿山は六種の言語を話し、そして唐朝に仕えました。その巧みな自己宣伝と、辺境の防備を異民族にさせようとする唐朝の意向によって節度使となり、大きな軍事力を握ったのであります。そして、玄宗げんそうと楊貴妃ようきひに信任されて、その勢力を拡大していったのです。

天宝十四(七五五)年には、現在の北京付近で兵を挙げて「大燕皇帝だいえん」と名乗ったのです。一時は洛陽や唐の都の長安を落としましたが、失明とできものに苦しんで、後継者争いから、次男の慶緒けいしよに殺されました。

乱はこのあと、慶緒が部下の史思明ししめいに殺されてしまい、史思明は、その子の史朝義に殺されるなど、内部分裂を重ねて、最後は民衆の自衛団とウイグル族の力で鎮圧されてしまったということで、この人も非常に悪因縁の強い人であります。

大聖人様は、阿闍世王や安祿山のような悪子の例を引いて、子供こそ宝であるということをおっしゃっているのです。

私は、最近の新聞などを見ていると、「子は宝」という意味が、どうも変なふうに誤解されてしまっているのではないかと思います。つまり、教育等が、どうも少し違う方向に行ってしまうのではないかと思います。子の自由ということは大事であります。それが放任主義的な自由というものに成り代わってしまっているのではないのでしょうか。

基本的には、子を育てるのは親の責任だと思います。世間では、親が子供のことで、学校の先生に文句を言う。すると、学校は学校で、お母さん達のせいにする。それで、どちらに責任があるかなどと、わけの解らない論議をして、もめている。そういう例が実際にありますよね。

やはり、自分が生んだ子は自分達がしっかり育てることが、まず大事なのではないのでしょうか。それには、この信心に付いて、朝夕の勤行からしっかりとしていけば、子供は自然に親孝行になるんですよ。やはり親孝行ということが非常に大事なんですね。

ところが、今は、どうも、そういう傾向が薄れつつあるような感じがしてなりません。だから、我々はきちんと子供を少年部に出すとか、中等部や高等部といったものもあるわけですから、そこでもってしっかりと信心を鍛えていってもらおう。また、自らも、そういう信心姿勢をもって子供を教育していく、ということが大事だと思います。

例えば、朝、一緒に勤行する。この一事だけでも変わりますよ。子も変わるし、親も変わる。だから、この信心をしっかりとやっていけば、絶対に悪子を生むことはないのです。

逆に、悪い因縁というものもありますから、やはり自分がしっかりと信心していかない

と、その因果応報で子に報いて、親不孝の子を作ってしまうということがあるのではないのでしょうか。ですから、まず信心第一に、日常生活のなかで、特に朝の勤行をしっかりと行っていく。少年部会があれば、それに連れていく。中部会や高等部会、あるいはお寺の御講などの行事に積極的に参加していくことが大事であると思います。

それでは、本文に入ります。

「法華經に云はく『若し法を聞く者有らば一として成仏せざること無し』云云。文字は十字にて候へども法華經を一句よみまいらせ候へども、釈迦如来の一代聖教をのこりなく読むにて候なるぞ」とあります。

この前の文には、

「法華經の御宝前に申し上げて候」（同 一四七四頁）

とありますけれども、この「法華經」とは、一往は文上の法華經を指しますが、再往は法華經寿量品文底秘沈の南無妙法蓮華經、すなわち末法の法華經である三大秘法の御本尊のことです。

したがって「若し法を聞く者有らば一として成仏せざること無し」とある「法」とは、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華經のことであり、この三大秘法の南無妙法蓮華經を聞く者は、一人として成仏せざることなし、と仰せられているのであります。

この「若し法を聞く者有らば一として成仏せざること無し」の文は、漢文に直しますと、

「若 有聞法者 無一不成仏」（法華經 一一八頁）

という、わずか十字であるけれども、法華經はこの一句を読んだだけでも、仏の一代聖教を残りなく読んだことになる、と仰せられております。これは、法華經すなわち妙法蓮華經を聞く功德、読む功德の広大なることを述べておられるのです。

ここで「読む功德」とは何かというと、これは単に読むというだけではなくして、身口意の三業にわたって読むことが大事であります。また、同じく「聞く」という意味は、身口意の三業にわたって法を聞くということになるのであります。ですから、上っ面だけ読み聞くのではなくして、身口意の三業にわたるということが、信心の上では極めて肝心なのであります。

そのあと中略して、「されば此の經文をよみて見候へば、此の經をきく人は一人もかけず仏になると申す文なり」と仰せであります。これは、先程の法華經方便品の御文についての結論でありまして、この法華經を聴聞する者は一人も残らず皆、成仏すると仰せであると、重ねて御教示をされております。

次に、四番目の『妙法尼御前御返事』です。

#### 4 妙法尼御前御返事

夫 以 見れば日蓮幼少の時より仏法を学し候ひしが、念願すらく、人の寿命は無常なり。出づる気は入る気を待つ事なし。風の前の露、尚譬へにあらず。かしこきも、はかなきも、老いたるも若きも、定め無き習ひなり。されば先づ臨終の事を習ふて後に

## 他事を習ふべし（御書一四八二二七行目）

当抄は、妙法尼へ与えられた御書でありまして、弘安元（一二七八）年七月十四日の御述作であります。

題号に「妙法尼御前」とございますが、大聖人様の御在世中、妙法尼という人は何人かいたようであります。一人は岡宮おかのみやの妙法尼、もう一人は四条金吾の母、もう一人は佐渡なかおきの中興入道の母、さらには日目上人の父・新田五郎重綱しげつなの母が妙法尼と呼ばれておりましたが、この書は岡宮の妙法尼が賜った御書であります。

本書の概略を申し上げますと、初めに妙法尼よりの手紙のなかから、夫の臨終の有り様を述べている一節を挙げ、続いて臨終の相に関する文証を示して、自身発心の動機が人の無常ぐどうにあり、求道の態度まが「先づ臨終の事を習ふ」ことにあることを述べられて、臨終の相によって未来の果報を推断することができると説かれております。

そのあとに、亡夫の臨終が好相であったことから、後生は必ず善処であろうと仰せられ、特に亡夫が臨終に唱題しょうりょうを続けたことを挙げて、

「しかれば故聖靈しょうりょう、最後臨終に南無妙法蓮華經唱となへさせ給ひしかば、一生乃至無始の悪業変じて仏の種ぼんのうそくぼだいとなり給ふ。煩惱即菩提しょうじそくねはん、生死即涅槃、即身成仏と申す法門なり」（御書 一四八三三）

と、唱題の功德と亡夫の信心決定けつじょうを褒められ、最後に亡夫の成仏より推察して、妻であるあなたも即身成仏することは疑いないであろう、とおっしゃっております。

本文を拝読しますと、「夫それおもん以みれば日蓮幼少の時より仏法を学し候ひしが、念願なげすらく、人の寿命は無常なり。出づる気は入る気いを待つ事なし。風の前の露なのおと、尚ま譬へあらず。かしこきも、はかなきも、老いたるも若きも、定め無き習ひなり。されば先づ臨終の事を習ふて後に他事を習ふべし」と、臨終の大事について述べられております。すなわち、

「日蓮は、幼少の時から仏法を学んできたけれども、いつも心に懸けていたことは、人の命は無常で、出る息は入る息を待つことなく、風に吹かれる露よりもはかなく、あつけない。そして、賢賢きも、はかなき、つまり愚かなるも、また老いたるも、若きも別なく、その命は移り変わって、定めのないものである。だから、普段の用心として信心を怠りなく励み、まず常々臨終のことを習って、のちに他のことを習うべきである」

とおっしゃっているのであります。

この臨終の大事につきましては、『当世念仏者無間地獄事』に、

「何いかに況いわんや念仏宗の長者たる善慧ぜんえ・隆観しょうこう・聖光さつしょう・薩生あくそう・南無・真光等皆悪瘡等の重病を受けて、臨終に狂乱して死するの由よし之これを聞き又之を知る。其の已下の念仏者の臨終の狂乱其の数を知らず」（同 三一四四）

と、謗法の害毒は臨終の大事に歴然として現れることを示されております。

また『生死一大事血脈抄』には、

「所詮臨終しよせん只今ただいまにありと解りて、信心を致して南無妙法蓮華經と唱ふる人を『是人ぜにん」

命終為千仏授手、令不恐怖不墮惡趣』と説かれて候。悦ばしいかな一仏二仏に非ず、百仏二百仏に非ず、千仏まで来迎し手を取り給はん事、歡喜の感涙押へ難し。法華不信の者は『其人命終入阿鼻獄』と説かれたれば、定めて獄卒迎えに来たつて手をや取り候はんずらん。淺猿淺猿、十王は裁断し俱生神は呵責せんか」(同 五一三)

とおっしゃっているのです。

このなかに「是人命終為千仏授手、令不恐怖不墮惡趣」とあるのは、法華經の普賢菩薩勸發品の御文で、訓読しますと、

「是の人命終せば、千仏に手を授けられて、恐怖せず、惡趣に墮ちざらしめたもうことを為」(法華經 六〇二)

と読みます。また「其人命終入阿鼻獄」というのは、

「其の人命終して 阿鼻獄に入らん」(同 一七六)

と読むのであります。

そして「十王は裁断し俱生神は呵責せんか」とおっしゃっておりますけれども、「十王」というのは、十王經で説くところでは、冥土には死者を裁く十人の王様がいますのです。つまり、冥土で、死者の生前に犯した罪業を、初七日から三回忌まで次第に裁断していくのであり、十王はいずれも本地は仏・菩薩で、内に大慈を持ち、外に怒りの相を現じております。

解りやすく言うと、私達が死んだあとに冥土へ行くと、この十王が待っており、おまえは何をやってきたかと裁断されますよ、ということです。だから、悪いことはできないのであります。

ちなみに、十王の名前を挙げますと、まず秦広王で、これは初七日に裁き、惡を廢し善を修めさせる王とされます。

次が初江王で、これが二七日に、死者の三途の川を渡るのを監視するというのです。そのような、とても怖い王様がいますのです。

それから、宋帝王は三七日、これは邪淫の罪を糾すわけです。

四番目が五官王で、これは四七日に、妄語の罪を糾されます。

それから五番目が、皆さんもよく知っている閻魔王です。つまり、五七日に罪の輕重や善惡を監察して、悪いことをした者に対しては、獄卒は鉄の棒をもって責めるのです。

六番目の變成王は、六七日に死者の惡を責めて善を勧める、そういう王様です。

七番目が泰山王で、これが七七日に罪人の来世に生まれる處を定めると言っています。

八番目の平等王は百力日に、与えて様々に教化して、かつ公平に罰する王様であります。

九番目が都市王で、これは一周忌に法華經および様々な仏様の功德を説くと言われます。

それから十番目が五道轉輪王で、これは三回忌に、衆生の愚癡や煩惱を糾すのであります。

この十王の裁断を受けて、来世はどこに行くかが決まると、お經のなかで説かれてい

るのであります。

また「俱生神」とありましたが、これは「俱ともに生ずる神」という意味で、人間が生まれると俱ともに生ずる神様であります。これは、薬師本願経では、すべての有情うじょうにあって、その者の行為についての善悪を記し、それを漏らさず閻魔王どうみょうに報告する神様であります。ですから、同生神どうしょうじんとも言われたり、あるいは一般に同生・同名の二天と同一視されている神様であります。

『生死一大事血脈抄』には、

「相構あいかまへ相構ごうじょうへて強盛しんりきの大信力を致して、南無妙法蓮華経臨終正念と祈念し給へ。生死一大事の血脈これ此より外ほかに全く求むることなかれ。煩惱即菩提・生死即涅槃これとは是なり。信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」(御書 五一五ご)

とおっしゃっております。この御文は、皆さん方もよく御承知だと思いますが、このなかで大事なことは「信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」とおっしゃっているように、まさに「信心の血脈」がなければ、いくらお題目を唱えてもだめだと言っているのです。

では、この「信心の血脈」とは何かというと、総本山第六十五世日淳上人は、

「蓋し生死一大事血脈抄けだに於て『信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり』と仰せられた血脈は脈絡みやくらくのことで、即ち信心がなければ脈絡は成り立たないとの御意ぎいであらせられ『夫れ生死一大事血脈とは所謂妙法蓮華経是なり』とは血液たる仏法を御指し遊ばされてをる」(日淳上人全集下 一四四二ご)

とおっしゃっているのです。

ちなみに、この「脈絡」というのは、血みやくかんの流れる脈管、物事のつながりとか、筋道を言うのであります。

また日顕上人は、このことにつきまして、

「血脈相伝ほつたいには法体の血脈、それから唯授一人・金口相承こんくの血脈、それから法門の血脈、そして最後に信心の血脈という、この四つの血脈が挙げられるのである。しかし、それもことごとくは、法体の血脈が根本であるから、そこから離れて信心の血脈はないんだ。ところが創価学会の者どもは、『信心の血脈』ということだけを言って、『御書根本』、『我々は大聖人に直結して、その信心の血脈が一切の、本当の血脈だ』ということをおっしゃるけれど、これほど大聖人の御書をいい加減に並べて、そして切り文をもって全体の趣意を乱し、我見・我意でもって御書を解釈しておるといふ姿はないのである」(大日蓮・平成九年九月号 四三ご)

とおっしゃっているのです。

だから、法体の血脈が根本であるということが解らなくて、自分達の勝手な解釈で、信心の血脈が一番大事だと言っているようでは、これはもう邪義邪法そのものになってしまうわけです。

法体の血脈がなんのことか解らず、ただただ「信心の血脈、信心の血脈」と言って、信心さえあればなんでもいいのだというような、とんちんかんなことを創価学会の者達は言うわけでありまして。その結果が、今日の有り様ではありませんか。戒壇の大御本尊

様に対しても誹謗悪口して、学会も今はもう、どこへ行くのか、ほかの新興宗教と全く変わらない姿を現じております。

しかし、あの人達も、元はお山に来て、御戒壇様にお目通りした方々ですから、このなかには、学会員に知り合いの方がいる方も、たくさんいらっしゃると思います。本当に、そういう人達を、大聖人様のもとに、本来の姿であるお山の信心に戻してあげていただきたいと思います。

心の中では、言うなれば、心の深層においては、あの人達もみんな、私達の折伏を待っているのではないのでしょうか。でも、行きがかり上、様々なことに惑わされて、その本心が打ち出せないでいるのではないのでしょうか。だったら、私達が、その扉を開いてあげることが大事であります。お知り合いの方は、たくさんいらっしゃると思います。是非、きちんと、その方々を折伏して、再び正しい信心に付いて、御戒壇様にお目通りできるように、みんなですていってあげたいと思います。是非、お願いいたします。

また『顛立正意抄』には、臨終の大事について、

「我が弟子等の中にも信心薄淡き者は臨終の時阿鼻獄の相を現ずべし。其の時我を恨むべからず等云云」(御書 七五一)

と、大聖人様がおっしゃっております。

さらに『単衣抄』には、

「されば此の衣を給びて候へば、夫妻二人ともに此の仏御尋ね坐して、我が檀那なりと守らせ給ふらん。今生には祈りとなり、財となり、御臨終の時は月となり、日となり、道となり、橋となり、父となり、母となり、牛馬となり、輿となり、車となり、蓮華となり、山となり、二人を霊山浄土へ迎へ取りまいらせ給ふべし」(同 九〇四)

と、まさに臨終正念ということが、いかに大事であるかについて仰せであります。やはり、最後は御本尊様にしっかりと信心をしていくことが、すべてになるわけですから、このことを忘れないでいただきたいと思います。

なお、この『単衣抄』は、建治元(一二七五)年八月の御書でありまして、単衣一着を御供養してくださったことに対する礼状であります。

つまり、立宗宣言以来、打ち続く三類の強敵との戦いを振り返りまして、釈尊の予言通りに難を受けたのは日蓮一人であるとし、末法の御本仏としての確信を述べられております。そして最後に、法華経の行者に衣を供養する功德を説いて、夫婦共に成仏は間違いないと励まされているのであります。

先程拝読した御文の前から、言葉を足して簡単に述べてみますと、

「御供養された帷子を着て仏前に詣で、法華経を読み奉れば、法華経の文字は六万九千三百八十四字であり、一々の文字は皆、金色の仏であるから、衣は一つであるけれども、六万九千三百八十四の仏に、一々に着せ奉ることになる。それ故、この衣を御供養していただいたので、夫婦二人にはこれらの仏が訪れて、我が檀那であるとして守ってくださるでしょう。

今生には祈りとなり、財となり、御臨終の時には月となり、日となり、道となり、



橋となり、父となり、母となり、牛馬となり、輿となり、車となり、蓮華となり、山となつて、二人を靈山浄土へ迎え入れてくださるでしょう」

とおっしゃっておられるのであります。

これは、単衣一着を大聖人様に御供養申し上げたことに対するお言葉であります。つまり、御供養というのは、その志が尊いのです。その志こそが、この御文のなかにあるように、「今生には祈りとなり、財となり、御臨終の時には月となり、日となり、道となり、橋となり、父となり、母となり、牛馬となり、輿となり、車となり、蓮華となり、山となつて、二人を靈山浄土へ迎え入れてくださるでしょう」という大功德の元であり、それに対して大聖人様から温かいお礼が述べられている次第であります。一つひとつの本当に心の込もった御供養が、どれほど尊いものであるかということ、心して拝していただきたいと思ひます。

宗門は今、皆様方の御協力によりまして、先般、日興上人御生誕七百七十年を迎え、いよいよ平成三十三年の日蓮大聖人御聖誕八百年を目指して出発をいたしました。やはり、その戦いのなかで、我々は必ず、立てた誓願は必ず達成するという一念のもとに、行動を取ってもらいたいと思ひます。

本年までの戦いは、結果的には、たしかに全体として誓願を達成いたしました。残念ながら一部には、誓願が達成できなかった支部がありました。その支部は、次の戦いには、必ず誓願を達成していただきたいと思ひます。

すべての支部が誓願を達成するという事は、非常に大きな意味があると思ひます。

よく言うでしょう、学校で試験があつて、百点を取つた者と九十九点を取つた者とは違ひますよ。九十九点というのは、九十九点という限度があるのに対して、百点というのは、あるいは百五十点かも知れない、二百点かも知れない、千点、二千点かも知れない。百点というなかには、そういう無限の可能性を持っているわけ。だから我々は、誓願を立てたならば、必ず達成するということが大事だと思ひます。

一つには、その誓願は仏様、御本尊様に誓つたという意味があるのであります。だから、御本尊様に誓つたからには、私達は何がなんでも誓願を達成しなければならないのであります。

したがつて、その誓願を達成するところ、御本尊様から褒められるのであります。この御書にあるように、「今生には祈りとなり、財となり、御臨終の時には月となり、日となり、道となり、橋となり、父となり、母となり、牛馬となり、輿となり、車となり、蓮華となり、山となつて、二人を靈山浄土へ迎え入れてくださる」という、そういう大きな功德を頂戴することができるわけ。であります。

どうぞ、今回の一つの経験<sup>かて</sup>をさらに糧として、次の目標である法華講員八十万人體勢構築に向かつて御精進くださることを心からお願いいたし、本日の講義を終了いたします。